

<森田>

私は、低学年から飼育させた経験と、4年生から飼育させた経験があります。低学年から経験させると、ほとんどの子供たちは一生懸命飼育してくれます。やはり、飼育を嫌がる子が少なく、小さい頃からの体験の方がいいと思います。しかし、4年生からの飼育では、両極端になりました。結局、好きな子供はずっと抱いていますが、全く関心を示さない子供もいます。したがって、ふれあわせる時期も関係あるのではないかと感じました。

それから、継続飼育をすると、必ず飼育活動が緩慢になってきますから、飼育している動物の作文を書かせてみたり、動物を外に出させてみんなであれあわせたり、動物のための小物を作ったりします。このような活動を、子供たちの気持ちが離れてきたところで、カンフル剤のように取り入れると効果があるようです。これはクラス全体のことですが、個人的には、2か月に一度、自分の家に動物が来ます。そうすると動物を独占できるわけです。そういう点では、そのときは、ものすごく子供の気持ちが高まります。しかし、クラス全体の気持ちが高ぶるわけではないので、ときどき、クラス全体での活動を取り入れるようにしています。

<宮川>

継続的に飼育を続けるということに関しては、飼育小屋での飼育活動というよりも、教室内での飼育において、どのように継続的に飼育していくかが問題になるのではないかと思います。このことに関しては、この研究会の会誌などをみていただくといろいろな事例が出ていますので、そのようなことを参考にいただければと思います。

たとえば、新潟のある小学校では、小学校1年生の9月頃から飼育を始めます。そして、2年生の9月まで飼育を続けます。そこで、その次の1年生にバトンタッチするようにしています。このようにして、教室内での飼育を永遠に続けていく試みをしています。これは、教室内ではなくて、学校内のホールで飼育していますので、2年生が3年生や4年生になっても、いつでも自分が世話をした動物を見に行くことができます。そして、モルモットですと、5～6年くらいで寿命が来ますので、だいたい1年生で世話を始めた動物の死を看取することもできるわけです。

このように、いろいろな方法があるのだと思いますので、今後いろいろな事例を重ねながら、教室内飼育において、飼育をどのように継続していくかということが、これからもっとたくさん論議されるのではないかと思います。

愛知教育大学の浜田さんからのご質問です。「本日は有意義なお話を多数お伺いすることができ、ありがとうございました。1点質問させていただきたいと思います。都市部を中心に恵まれない子供が増えていると思います。そもそも、自分が愛情を受けることに乏しいと感じている子供が少なからずいると思いますが、そのような子供たちも、小動物に対し、愛情を注ぐことができるのでしょうか。ともすれば、飼育動物が子供のストレスのはけ口になってしまうという可能性はないのでしょうか。私自身、飼育活動はとても重要で是非取り組みたいと考えていますが、先ほどのようなことが不安でたまりません。心配はありますが、心に傷を抱えた子供たちの癒しとなるような活動を行うことができればと考えております」

<嶋野>

今のお話のことも含めて、ストーリー性が大切なのではないかと思います。トピックで動物を子供に与えると、確かにストレスのはけ口になったりします。特に、先ほどの継続飼育のことにも関係しますが、「間口は小さく、奥行きは深く」ということをすれば、動物は、こちらが働きかけることによって反応してくれます。ですから、ただ見ているだけではなくてちょっとさわってみるとか、ちょっと餌をやってみるとか、こちらが働きかける行為を起こすと、相手は何らかの反応を起こしますから、そういうことを積み重ねていくことによって、ストレスというようなある場面の対象にはならなくなってくると思います。ですから、ストーリーをよく積み上げていくということが、ポイントなのではないかと思います。

<町井>

ストレスを持っている子供は、現在の状況に満足してなくて、不安な状態にあるのだと思います。その子供が、長く飼育していくうちに、最初はおもちゃのような扱いをしても、動物のぬくもりを感じる事ができ、だんだん変わっていきます。

このように、初めはいろいろなことが起きますが、教師の側として、それに驚かずに、子供一人一人の実態に合わせたふれあわせ方をしていくことが大切なのではないかと思います。

<森田>

おとなしいタイプの子供は動物をとってもかわいがってくれます。しかし、よく注意していないと、動物と自分との関係ばかりになってしまい、友達との関係を断ち切ってしまう子供がいます。それを許してしまうと、動物と自分だけの関係だけが強くなり、人間との関係が築けなくなってしまうので、私の場合は、10人で1匹というように、複

数で1匹の動物を飼育させるようにしています。こうすると、先ほどのようなことがある程度防げます。中には動物を変な風に抱く子供もいますが、そうすると、同じグループの子供が注意したり、あるいは獣医師さんから、「モルモットは人間から見たら怪獣みたいなんだよ」と教えられたりして、人間とのかかわりを保ちながら飼育活動をすることができるようになります。したがって、1人に1匹ではなくて、何人かで1匹というようにすると、みんなで一つの命を預かっているということを感じさせる効果も出ると思います。

<宮川>

町井先生には仔牛のことをご発表いただきましたが、抄録にウサギの飼育の仕方についての事例報告があり、それを読ませていただいてとても勉強になりました。というのは、われわれ獣医師側からするとどうしても「動物と子供」という関係を重視しがちです。町井先生の報告には、それからさらに一步踏み込んだ形で、子供と子供が手をつなぐ、家に帰ってだっこしてもらおう、というような、人と人とのふれあいの大切さが書いてあります。確かに、私も小学校に訪問に行き、子供の心臓の音を聞かせたりしていますが、町井先生の報告には、そこからさらに踏み込んだ形のふれあい方が書いてあります。今日は、そちらの方もご発表いただきましたかったのですが、そこには、ストレスを抱える子供たちの動物とのふれあわせ方や、友達どうしの関係の築き方などがとてもよく書かれてありましたので、是非、後で抄録の方にも目を通していただければと思います。

もう一つご意見をいただきました。「命の尊さとともに食育の大切さも学校教育の中で教えてほしいと思います」というご意見です。命の尊さと食育ということに関してご意見をいただきたいと思ひます。

<田村>



食育ということが言われ出して、各学校でも食育について取り組み始めたところです。われわれは、動物を食べているわけです。そして食べてい

ることに感謝をしながら生きているわけです。動物を飼育する上でも、そういうことを考えなくちゃならない。本県で話題になったことですが、学校で飼育している動物が動物園に行きライオンの餌になってしまったということがありました。動物園側からは、ライオンにとっても生の肉は大切であるというお話をいただきました。

低学年の子供たちには難しいかもしれませんが、動物を飼育しながらも、われわれが生きている上でも動物を食べるということを議論させあうことが大切であるということを知ることがあります。われわれが生きているのは、ほかの命をいただいて生きている。だから、自分自身もよりよく生きなければならない。そのような気持ちをもたせることが大切なのではないかと思ひます。

<無藤>

通常の食育ですと、栄養や味わい、調理という範囲ですが、動物を飼育する場合は、動物を世話する側に回るわけで、動物のためにえさを用意したりするわけです。したがって、食育ということに関して、もう少し広い範囲で能動的に関わる部分が出てくるわけです。

もう一つ今ご指摘があったように、食べるということは命をいただくことであるということですね。これは、むき出しで言うと小さい子供たちにとってはきつい話です。具体的に言うと、動物の中にはほかの動物を食べる動物もいます。たとえば、カマキリを飼っている子供とコオロギを飼っている子供がけんかするなどということもありました。このような経験をいろいろなところであることが大切なのではないかと思ひます。そのような視点から教育していかないと、「人間はほかの動物を食べている」ということをむき出しで与えることによるショックが大きいのではないかと思ひます。

<嶋野>

だからこそ、動物飼育なのです。つまり、育てることと食べることは繋げなければいけない。なぜ繋げなければいけないかという、よくつながった場合は、無益な殺生は絶対にやらなくなるのです。それから、同じいただくのでも、「だからおいしくいただきましょうね」、「だから残さずいただきましょうね」ということを理解させることができる。それが命をいただくことではないかと思ひます。それは、一生懸命育てているという文脈の上に乗ってくるものであるわけです。

農家の人たちが、「本当にスイカが食べたければ、1つくらい盗んだっていい。しかし、ストレスのはけ口として畑中のスイカをつぶされてしまうということに対しては、非常に憤りを覚える」

とおっしゃいます。これは、食べるわけではないので、一番罪が重いわけです。そのようにしないようにするためにも、しっかりと生き物を育てる必要があります。そしてその延長線上に、場合によっては食べるということが起こるわけです。したがって、自分が育てたものを食べるということも場合によってはあるかもしれませんが、普通はあまりありません。しかし、子供たちが鶏肉を食べていたとすると、これもどこかで育てられていたのだと繋げることができます。そうすれば、そこにはむやみに殺す、無目的に殺すということとはなくなるわけです。ここがポイントであって、食べるということは命を殺すことだと目くじらを立ててしまったら、おかしいと思います。人間が生きる上では、育てる視点や食べる視点をもって、結論から言えば、「だから育てるんですよ」ということになります。

<宮川>

だから、命を実感できる飼育が必要だということになりますね。

<矢部>



町井先生のところでホルスタインを2度飼育されたということに対して、食育の話が出ました。その教育をされたことについて、町井先生お願いします。

<町井>

2年生になったときに、あえて雄の飼育をしました。そのとき、牧場の方から、「搾乳はできないので肉になるんだよ」というお話をいただきました。それから、1か月くらい子供たちといろいろな話をしました。「こんなに大事に育てたのに、肉になっちゃうの？」と言う子供もいました。子供たちの中にもいろいろな思いがあり、子供たちとも命について真剣に話をすることができました。

<宮川>

「命の大切さを実感できる飼育を」ということで話を続けてきました。そこで、「実感できる」ということに対して、嶋野先生はコミュニケーション

ンが大切であるということをおっしゃいました。実感できる飼育を実際に行うためには、どのようなことを考えていかなければいけないか、実感できる飼育を行うための条件のようなものがあるのではないか、と思います。

これまでの先生方のお話を伺っていて、命を実感できる飼育を行う条件は、動物が適正に飼育できていることが一番大切なのではないかと思います。もう一つは、指導する先生方が、動物とのふれあいについて理解し、実践することができるかということです。その根底としては、やはり先生方に動物がかわいいと思っただけかかどうかだと思います。また、獣医師と地域の方々の連携ができていくかどうかということも、大きなポイントであると思います。

フロアに、日本学術会議の会員で東大名誉教授の唐木先生がお越しなので、唐木先生からご発言をいただきたいと思います。

<唐木>

動物を飼育することについて、メリットとデメリットがあります。動物飼育のデメリットは2つあって、1つは動物愛護の問題です。飼育動物が、動物愛護の精神にかなった飼育をされているのかどうかということで、動物愛護団体の方々からは、動物飼育に反対する声も上がっています。2番目のデメリットは公衆衛生上の問題です。これは先ほどもありましたが、動物が持っている病気の感染の心配と、アレルギーの問題です。

このようなデメリットがありながらも、メリットの方がデメリットよりも多ければ、動物飼育については、皆さん賛成されるはずですが、問題は、どのように飼育したら、どのような効果があるのかということで、これはまだはっきりしていません。このような事例が十分に集まっていないということです。先ほどの矢部先生から提示されたデータでは、半分くらいの先生方は、飼育動物をふれあい活動に活用していないということも指摘されました。このようにただ漫然と飼育していたのでは、メリットデメリットの計算ができないこととなります。

しかし、幸いこのような研究会ができて、教育にメリットがあるという事例が次々と集まっています。このような事例をもっとたくさん集めて、多くの人たちに知っていただくということ、そして、飼育動物は教育に必要であるということ、科学的な経験的な背景をもって伝えられるようになることが大切であると思います。

それから、先ほどの食育の問題ですが、私は、子供がかわいがる動物と、肉にして食べる動物は分けるということ、少なくとも子供のうちはこの

ようなことが大切なのではないかと思ひます。

<宮川>

ここで、まとめとして、パネリストを代表して、嶋野先生と無藤先生に一言ずつお願いしたいと思います。

<嶋野>

まず1点目として、飼育動物そのものが命をもっているということをお前提として考え、できることからやる、できるところからやる、ということをお基本に置きたいと思ひます。そして今日の事例発表はそれぞれ、それで成功していると思ひます。動物飼育には様々な外的条件によって制約されますが、それでやらないのではなくて、少しずつでもできることから、できるところからやる、ということをお根底に置いて進めることが必要だと思ひます。

2つめは、動物との関わりを作るといふことだと思ひます。子供も教師も体験が少ない。体験が少ないと、はじめはだいたい排他的、否定的になります。先日富良野へ行って、子供たちに自然体験をさせたときでしたが、ゴルフ場の芝生に子供たちを裸足で立たせようとしたところ、富良野の子供たちでさえ、「痛い、気持ちが悪い」と言っていました。しかし、少し関わっていくと、今度は踏みしめるという行為が起きました。ここからは今度は受容的になってきました。踏みしめるということは意識して感じようという行為ですから、そのような変容が出てきたのだと思ひます。このように、動物に対してもただ見ているだけではなく、ちょっと触れてみるということ、えさを与えてみるということ、そしてこのちょっとをだんだん広げていくことが、かかわりを作っていくことだと思ひます。

3つめは「じりつ」的にやる。これには「自立」と「自律」があります。幸い、獣医師さんたちや地域の人たちが非常に協力的です。しかし、その中で一部の人たちが、「学校のためにやっているのに、全部任せっきりにさせられた」と憤慨していました。やはり責任と分担ということをおしっかり意識して、そして、獣医師さんや地域の人たちとの連携をとっていくということ、これが、ここからの大きなポイントであり、配慮すべき事項ではないかと思ひます。

<無藤>

学校で動物を飼育することが、鳥インフルエンザなどの影響で、停滞したり減ってきたりする事実があります。しかし近年、動物についての専門家である獣医師さんと、教育の専門家である学校の先生方と、一緒に学校飼育動物を考へてこられるようになりました。その背景としては、栃木県

をはじめとして、いろいろな自治体で学校現場と獣医師会の取り組みが実りを結びつつあるということがあります。私は学校獣医師制度などもできたらいいと思ひますが、仮にそれができないにしても、全国的にかなりのところで両者の協力関係が生まれてきてはじめて、それが公に認められるようになるのではないかと思ひます。

もう一つは、子供と先生と獣医師と、それから保護者との関係を作っていくことが大切なのではないかと思ひます。保護者の方々に、動物を飼育することは子供にとって大切であるということをお理解していただくことで、初めて学校で飼育する意義を認めていただけるのではないかと思ひます。

それから、先ほどの食育の問題ですが、私は、子供がかわいがる動物と、肉にして食べる動物は分けるということ、少なくとも子供のうちはこのようなことが大切なのではないかと思ひます。

<宮川>

ここでお受けした質問などは、会誌やホームページなどの場で回答させていただくことになると思ひます。本日はありがとうございました。

<嶋貝>

パネリストの先生方ありがとうございました。

命を実感できる動物飼育の必要性を感じていただける方々にこのようにたくさんお集まりいただきありがとうございました。唐木先生からのお話にもありましたが、この必要性、大切さの事例をもっともっと集めて、多くの方々にこの大切さを知っていただくことが非常に重要であろうと思ひます。そのときに、教師が教師だけ、獣医師さんが獣医師さんだけで考へているのではなくて、一緒になって、教育の立場から、専門家の立場からお互い意見交換をしながら飼育をし、それが子供たちの成長に役立つようなものにしていく必要があると思ひます。そういう意味で、今日の講演、事例発表、パネルディスカッションは充実したものになったと思ひます。

この内容については、会誌の次号に掲載させていただきます。ご質問等がございましたら遠慮なく出していただいて、会誌としても充実したものにしていきたいと思ひています。

これからも、この研究会と小動物獣医師会が連携しながら、子供たちの命を大切にする心をはぐくんでいきたいと思ひています。本日はどうもありがとうございました。

次回の研究大会は来年の1月15日にお茶の水女子大学で開催する予定です。先生方からたくさんの実践を出していただき、たくさんの方々の参加についてもお待ちしております。